

主 題：復活がもたらす揺るがない希望**聖書箇所：ペテロの手紙 第一 1章3節**

救い主イエス・キリストが十字架にかかって、3日目によみがえられたことをお祝いするイースター、この後、私たちが一緒に考えたいのは「希望」についてです。まず、皆さんに質問があります。皆さんは今、希望を持っているでしょうか。私たちのまわりを見ると、心を不安にさせるようなことが毎日のように起こっています。アメリカとイランの間で起こっている争いを筆頭に、世界各地で戦争が起こっています。石油や日用品の値段が上がり、経済は次第に悪くなっています。地震などの自然災害があちこちらで起こり、ウイルスによるさまざまな病気が流行っています。また、そのようなまわりの重圧に加えて、私たち自身の生活のうちにも、さまざまな難しさがあふれています。職場でのトラブル、友人とのすれ違い、先の見えない将来のことで頭を悩ますこともあります。私たちのうちから喜びや平安を奪うようなあらゆる困難は身近にあふれています。そのような中で生きている私たちは、いったいどこに希望を見だし続けることができるのでしょうか。

この問いは、今回学ぶペテロの手紙が書かれた当時の信仰者にとっても大切なものでした。ペテロの手紙は、紀元65年頃にペテロによって書かれました。この1年前となる紀元64年に起こった歴史的な大事件を覚えていますか。それは、当時のローマ皇帝ネロによって引き起こされた「ローマ大火」でした。町を整備する目的のために放たれた火は、瞬く間に町中に広がり、町のほぼ半分を焼き尽くしたと言われていています。多くのいのちがこの火によって失われることになりました。当時、町に住んでいた人たちは、火事を起こした犯人が皇帝ネロで間違いないと確信していました。しかし、そのうわさを耳にしたネロは、自分に向けられた民の怒りを何とか逸らすために、その罪をクリスチャンになすりつけました。その結果、当時のクリスチャンは大規模な迫害を受けることになりました。ある者は生きたまま火あぶりにされ、ある者は見せ物として野獣に八つ裂きにされ、ある者は十字架につけられました。激しい迫害を受け続けた彼らは、住んでいた場所さえ追われて、さまざまな地域へと逃げざるを得なくなりました。自分たちの将来がどうなるかわからず、彼らはまさに、いつ終わるかわからない絶望的な状況下に置かれていました。

もし、私たちがそんな状況下にいる人たちに対して手紙を書くとしたら、どのようなことばを綴るでしょう。真っ先に彼らにかけることばは何でしょう。現状を確認する心配のことばでしょうか。苦しみに同情する慰めのことばでしょうか。不思議なことに、ペテロはそのようなことばで手紙を書き始めていませんでした。きょうのみことばを見てください。冒頭で簡単に挨拶をしたペテロは、このようなことばで始めました。I ペテロ1:3「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。」と。これは、神様への賛美でした。苦しみの中にいる兄弟姉妹たちに対して、彼はまず、私たちの神様に心からのほめ歌をささげようと励ましていました。不思議に思いませんか。なぜなら、私たちには、苦しみと賛美は相反するもののように思えるからです。絶望的な状況の中で口にできるのは嘆きであっても、感謝は出てこないのではないかと思います。しかし、みことばはそれが可能なのだと訴えていました。それは、キリストを信じる者は、たとえ苦しみの中でも賛美を生み出す本当の希望を持っているからでした。苦しんでいる兄弟姉妹のことを心から気にかけていたからこそ、ペテロは本当の希望が何かということを手紙の初めで思い出させようとしたのです。

きょう、皆さんと考えたいことは、その「希望」についてです。特に今回の箇所から「四つの希望」の内容について見て取ることができます。一つずつ順番に考えていきますが、聖書が与えている本当の希望は、私たちのうちに喜びをもたらしてくれます。それを考えながら神様に賛美をささげましょう。

I ペテロ 1:3

「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」

○苦しみと希望：賛美を生み出す“四つの希望”

1. 大きなあわれみ 3 a 節

たとえ苦しみの中にあっても賛美を生み出してくれる希望の一つ目は、大きなあわれみです。神様が大きなあわれみのお方である事実は、どのような状況にあっても人々の心に喜びをもたらす希望でした。もう一度、3節の冒頭に注目してください。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、」とあります。困難の真っ只中であって、ペテロが最初に思い出させていたのは「あわれみ」という神様のご性質でした。どうして、この「あわれみ」が困難な状況にいる者にとっての希望となるのでしょうか。いろいろな場面で「あわれみ」ということばを耳にすることがありますが、そもそもどのような意味を持つことばなのでしょう。

▶「あわれみ」

ある辞典を見ると「人の苦しみや悲しみに深く同情すること」と、おもに感情を表す意味で定義されていました。だとすると、神様があわれみ深いお方というのは、単に神様が私たちに同情してくださるお方だということでしょうか。そうではありません。ここで使われている聖書が描く「あわれみ」というのは、それよりもはるかに深いものでした。このことばには「深刻な必要を覚える人や絶望的な状況下にある人に対して優しさや配慮を示すこと」、「その人を実際に助け出そうとすること」という意味が含まれていました。つまり、苦しみの中にいる人に対して、単に同情して気にかけてあげるといっただけのものではありません。絶望的な状況にいる人に目を留めて、その状況をどうにか解決してあげたい、助け出してあげたいと願い、行動を伴うものでした。聖書が描く真の「あわれみ」とは、たとえその苦しみが本人の責任によるものだったとしても、変わらずに助けの手を差し伸べようとする愛に満ちた優しさの表れでした。絶望的な状況にいる者に手を差し伸べ続ける優しさでした。だからこそ、神様があわれみ深いという事実は、特に絶望を経験する者にとって、測り知れない希望をもたらすものでした。

かつての信仰者たちも同じでした。たとえば、肉体的な苦痛をもって絶望的な状況にいた者も、同じように神のあわれみを求め続けていました。ダビデもある時、重い病を患い、からだも心も疲れ果て、死を覚えるほどの絶望的な状況にいました。そんな中で彼が希望を見いだしたのは、主の「あわれみ」でした。詩篇6:2、4に彼の祈りが書かれていました。「:2 主よ。私をあわれんでください。私は衰えております。主よ。私をいやしてください。私の骨は恐れおののいています。」、「:4 帰って来てください。主よ。私のたましいを助け出してください。あなたの恵みのゆえに、私をお救いください。」と、ダビデは祈っていました。

イエス様が地上で働いておられた時に、道ばたにいたふたりの目の見えない人も叫び続け、求めていました。真っ暗な絶望の中に置かれ、無力だった彼らが希望を見いだしたのも、主の「あわれみ」でした。マタイ20:30-31にその光景が記されています。「:30 すると、道ばたにすわっていたふたりの盲人が、イエスが通られると聞いて、叫んで言った。「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ。」:31 ここで、群衆は彼らを黙らせようとして、たしなめたが、彼らはますます、「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ」と叫び立てた。」と。どちらにも共通していたのは、自分ではどうすることもできない状況下に置かれ、その中で主の「あわれみ」に望みを置いていたことです。それだけが彼らにとって助けを求められる唯一の希望でした。

実際に主は彼らのことを助けられ、ダビデの祈りを聞かれました。また、目の見えない彼らにイエス様がとられた行動がマタイ20:34に書かれています。「イエスはかわいそうに思って、彼らの目にさわられた。すると、すぐさま彼らは見えるようになり、イエスについて行った。」と。これが主の「あわれみ」という

ものでした。ただの感情ではありません。主の「あわれみ」は、自分の手に負えない苦しみや葛藤の中に置かれている者を力強く支え、実際にそこから救い出すのに十分すぎる神の力でした。

また同時に、この「あわれみ」は肉体的な部分のことだけではなく、霊的な部分においても同じでした。主の「あわれみ」は霊的な絶望の中にいる者にとっても見いだすことのできる唯一の希望でした。その事実をパウロはエペソ2：1－5でこのように述べています。「：1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、：2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。：3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。：4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、：5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」と。

主の「あわれみ」が示されたのは、当然それに値する者たちではありませんでした。罪を持って生まれた私たちはみな、例外なく、生まれながらに神を求めず、代わりに自分の心の望むままを行つて生きていた者たちでした。ここにいるひとりひとりを特別に造ってくださった神様を愛そうともせず、罪を愛した私たちは、神様の忌み嫌われる悪を積み重ね続けていました。神様に逆らい、神様の栄光を汚す者として生きていたから、私たちはみな、生まれながらに神様の御怒りを、永遠のさばきを受けて当然の存在だったわけです。そのような運命が待っていただけでなく、神の御怒りを前にする時、残念ながら私たちにできたことは何もありませんでした。どんな小さな罪でさえ、必ずふさわしい報いを与えられる聖く正しいお方を前にした時、罪に汚れた私たちは救いに関して何もできない無力な存在でした。文字どおり私たちのうちには何の希望もありませんでした。

そんな絶望的状况にいた私たちに対して、あわれみ豊かな神様がまず愛を示してくださったわけです。ご自分に逆らう敵であった者のために、ひとり子であるイエス様を与えて、この方が十字架にかかって死なれたことを通して、神様はご自分の愛を私たちに示してくださいました。ローマ5：8にもはっきりと書かれていました。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」と。私たちは、自ら神様に逆らう罪ゆえに深刻な狀況に置かれていました。無力で何もできない私たちは、滅ぼされることは自業自得だと神様から遠く突き放されてもおかしくない狀況であるにもかかわらず、神様が大きな「あわれみ」を持つお方だからこそ、助け出してくださいました。私たちの深刻な狀況に目を留めて、自ら愛を示してくださいました。確かに、主の「あわれみ」は、自分の手に負えない苦しみや絶望的状况にいる者を力強く支え、そこから助け出すのに十分すぎる神の力でした。そんな大きな「あわれみ」を持つお方がおられるなら、私たちはどのような狀況にあつても、賛美できる理由を持っているわけです。感謝できる理由を持っています。これこそが、苦しみの中でも賛美を生み出し続ける一つ目の希望でした。

2. 新しいのち 30節

二つ目の希望は、新しいのちです。神様の大きなあわれみは、それだけで終わるのではなく、信じるすべての者のうちに、新しく生まれるというすばらしい希望をもたらしてくれました。Iペテロ1章に戻って続きを見てください。「神はご自分の大きなあわれみのゆえに、……私たちを新しく生まれさせて」と、ここに興味深いことばが出てきました。

▶「新しく生まれさせて」

「新しく生まれさせて」と訳されていることばは、ある文脈では植物に関連して使われていました。春になると木々や草花がいのちを得て、芽吹く様子を描くことばとして使われていました。当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、少し考えてみてください。植物は、単にそこに土があれば育つわけではありません。栄養のない、微生物のない死んだ土地では何も生きてきません。仮に、一生懸命に水や

りをしても、死んでいる土にいのちが芽生えることはないわけです。

見つけた一つの記事にこのようなことばが記されていましたので紹介します。「多くの栽培者は、目に見えるものに注目します。しかし、本当に優れた栽培者は、目に見えないものに注目します。葉、茎、花、実、人の関心はそこに向けられます。けれども、地上で起こるすべてのことは、地下で起こっていることの反映に過ぎません。土は単なる栽培のための媒体ではありません。土は生きた生態系です。その生態系が死んでいるなら、どんな肥料も本当の成長を引き出すことなどできません。」と。死んでいるものから実が出てくることがないように、それこそが主を知る以前の私たち自身の姿でもありました。先ほど見たエペソ2：1でもはっきりと言われていました。「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」と。だれも例外ではありません。私たちもみな罪の中に死んでいた者でした。すべての面において死んだ者でした。死んだ私たちから出てくる思い、考え、ことば、行動も、すべてが罪によって汚れ、神様に敵対するものでした。人の目には良いと思えることや、すばらしいことをしている人はたくさんいますが、聖なる神様の目から見れば、正しいと認められるものは何もありませんでした。霊的に死んだ者から神様を喜ばせることのできる実など、生まれることは決してなかったわけです。神様に逆らい、罪の中に死んでいた私たちは、生まれながらに神様の役になど何も立たないからこそ、神様の御怒りを受け、永遠のさばきにふさわしい者でした。神様の御怒りを前に死人だった私たちにできたことは何もありません。死人に対して声をかけても何の応答もないように、霊的に死んでいる者が、自分の生死に関してできたことは何もありません。死人は文字どおり、何もできない存在でした。

そのような無力で希望のない私たちのために、神様が驚くべき愛を示してくださいました。死んでいた私たちのうちに、神様がいのちを与えてくださったわけです。先ほど見たエペソ2：4-5に書いていました。「4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」と。パウロはローマ6：8でもこのように述べています。「もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることもなる、と信じます。」と。かつての私たちは、神様を喜ばせる実など一つも実らせることのできない死んだ者でした。しかし、ただ主のあわれみによって、死んだ心が新しく造り変えられた結果、私たちはかつて愛した罪から離れることができるようになっただけでなく、主のために良い義の実を結ぶことができる者へと変えられました。それ以上に、私たちのために死なれ、いのちをささげて、よみがえられたキリストとともに生きていくことができる者になりました。新しいいのちを持って主のために生きていくことができるようになりました。死んだ者に、新しいいのちを与えることができる力強いお方がともにいてくださるという事実は、どのような状況にあっても、私たちのうちに大きな励ましをもたらしてくれるものになるわけです。これこそが、苦しみの中でも賛美を生み出し続ける二つ目の希望でした。

3. 生ける望み 3 d 節

三つ目の希望は、生ける望みです。神様の大きなあわれみは、無力だった罪人を罪から救い、新しいいのちをもたらしただけでなく、永遠に続く確かな希望を与えてくれるものでした。I ペテロ1：3ではこのように続けていました。「……神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、……私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」と。あえて言う必要がないかもしれませんが、この世に住んでいる人はみな、希望を求めています。日々、いろいろなものに希望を見いだそうと歩んでいます。ある人は安心を求め、自分の財産や持ち物に希望を置こうとします。ある人は平安を求め、安定した職業や緻密な人生計画に希望を置こうとします。またある人は慰めを求め、自分の愛する家族や友人に希望を置こうとします。多くのものに希望を置いて生きようとしています。しかし、その結果どうなるでしょう。いろいろなものを信じて期待をしても、裏切られて失意を覚えることが多々あります。大丈夫だろうと言いつつ聞かせて信頼していたものが急に崩れ去ってしまう時、私たちは慌てふためいて恐怖や不安を覚えるこ

とがあります。何度も何度も期待する心が打ち砕かれると、もうだめだと絶望的になります。そのような現実に直面する時、どうしてなのだろうと疑問を覚えるかもしれません。

しかし、これこそがまさに聖書が教えているとおりなのです。この世の希望に関して、みことばはこのように述べています。ヨブ記8：13に「すべて神を忘れる者の道はこのようだ。神を敬わない者の望みは消えうせる。」と。箴言10：28にも「正しい者の望みは喜びであり、悪者の期待は消えうせる。」と書かれています。何が言われていますか。神様以外の何かに見いだそうとする希望は、初めから消えてなくなってしまうことが約束されているということです。神様を忘れ、神様を除いて見いだそうとする望みは、私たちが拠り頼むことが決してできない死んだ希望です。多くの人たちが聖書が言うとおりに生きています。神様を除いてこの世のさまざまなものに期待して生きているから、消え去っていくと言われているにもかかわらず、そのものを見て、神様を見ようとはしません。もし、今違うところを見ているのであれば、どこに希望を置くべきなのかを、真剣に考えるべきです。中身のない死んだ苦しみの中にいる者に喜びをもたらすものなど、いっさいありません。

▶「望み」

ペテロがここで述べているのは、そのような希望ではありません。主の大きなあわれみをもたらす希望は、生ける望みでした。死んだ希望ではなく、生きている望みでした。聖書が与える希望は、淡い期待や単なる願望ではありません。ここで使われている「望み」ということばにも「あることが成し遂げられると、確かな根拠に基づいて期待し、前を見据えること」という意味が含まれていました。つまり、生きている希望は、確かな根拠、神様と神様の約束に根差した揺るがない将来への確信でした。本当の希望は、世の中のさまざまなものから見いだすものではなく、永遠に変わらない神様から来るものでした。

詩篇71：5にこのように記されています。「神なる主よ。あなたは、私の若いころからの私の望み、私の信頼の的です。」と。このような揺るがない将来の希望こそ、かつての信仰者たちを支え続けてきたものでした。ヘブル11章には信仰の勇者たちの姿が描かれています。彼らもみな、神に従い、多くの試練を経験した者たちでした。いったいなぜ彼らは、困難の中で最後まで忠実に歩み続けることができたのでしょうか。それは、彼らが神様とその約束に根差して将来を見続けていたからでした。たとえば、アブラハムもそうです。アブラハムが息子イサクをささげるように神様から命じられた時、彼は喜んで従いました。どうしてでしょう。その理由が11：17-19に記されています。「:17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。:18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」と。モーセも同じです。モーセもエジプトの暮らしではなく、イスラエルの民とともに苦しむことを選択しました。その理由が11：24-26に記されています。「:24 信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、:25 はかない罪の楽しみよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。:26 彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。」と。かつての信仰者たちは、彼らのうちに凄まじいほどの力と忍耐があったのではありません。彼らはただ、置かれた状況ではなく、その先にある神様の約束に目を留めていたから、最後まで希望を失うことがなかったのです。

私たちも同じです。大きなあわれみによって新しくされた私たちは、神様からあり得ないほどの多くの約束が与えられています。どのような約束がありますか。一度、天に戻ったキリストが再び帰ってくるという約束を持っています。いつの日か、私たちの愛しているキリストの御顔を見ることができるといふ約束を持っています。いつの日か、罪に汚れているからだに栄光のからだに変えられるという約束を持っています。いつの日か、天において私たちは報いとして永遠の資産を受け継ぐという約束も持っています。今見ているこの手紙でも、ペテロは生ける望みについて語った後に、彼らに神の約束を思い出さ

せるため記したわけです。Ⅰペテロ1：4に「また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。」と。希望は、置かれた状況そのものを変えないかもしれません。希望を持って歩んでいても、いろいろな苦しみや戦いはあります。その状況が一瞬にしてなくなるのではありません。しかし、本当の希望は、状況の見方を変えることができます。その状況にある神様の約束を覚える時に、私たちは喜ぶことができます。ですから、約束されているものを手にする日が近づいていることを忘れないことです。

チャールズ・スポルジョンもこのように述べています。「溺れそうになっている泳ぎ手も、近くに船が来るのを見れば、勇気を取り戻し、全力で泳ぎます。自分の泳ぎが無駄ではなく、確かに救いの繋がることを期待するからです。同じように、逆境の波やうねりの中にあっても、クリスチャンは希望を保ち続けます。将来の栄光という素晴らしい希望があるゆえに、天の岸を目指して力強く泳ぎ続けるのです。私たちの希望は、魂を浮かび上げさせ、沈まないように支え、確信を与え、勇気を持ち続けさせるのです。」と。

皆さん、生ける希望が与えられています。だとすれば、その希望を覚える時に、私たちのうちに賛美や感謝が生まれてきませんか。これこそが、苦しみの中でも賛美を生み出し続ける三つ目の希望でした。

4. キリストの復活 3b節

四つ目の希望は、キリストの復活です。お気づきになられたでしょうか。ここまで私は一つのことばを飛ばしてきました。みことばをもう一度見てください。ペテロはこの箇所 요약、中心とも言える真理を、このように記していました。Ⅰペテロ1：3「……神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちに新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」と。改めて考えてみてください。私たちがここまで見た希望は、どれもすばらしいものでした。主が大きなあわれみのお方であり、あわれみによって新しいいのちが与えられ、生ける望みを持って歩んでいくことができることは、確かにすばらしい喜びをもたらす事実でした。

しかし、この事実はこれまでも聞いてきて、知識としてはすでに知ってることではありませんか。それでも、正直言って、これらの事実を疑うことはありませんか。ひどい苦しみに遭う時、私たちは疑問を抱くことがあります。本当に神様はあわれみ深いお方なのかと。もしそうなら、今自分が味わっている悲しみや痛みは何なのかと。絶え間ない罪との葛藤の中で不安になってしまうこともあります。これほどまでも罪深い自分の罪が、本当に赦されているのだろうか。また、自分の目には将来の約束があまりにも遠くに思えて、本当に主の約束は成し遂げられるのかと心配になることもあります。私たちはいろいろな知識を持っていても、残念ながら目の前のものに容易に心が騒がされ、うちなる確信が揺らぐことがあるわけです。与えられている希望に自分のすべてをゆだねることが本当にできるのだろうか。ゆだねたのに裏切られることはないのだろうか。そのような疑い深い私たちに対して、神様は一つの明確な答えを与えてくれています。「わたしの希望は決して揺るがされることなく、いつでも確信できる」と。どうしてでしょう。それは「イエス・キリストが死者の中からよみがえられた」からです。これが、もうすでに起こった事実だからこそ、この先に起こることも、どんな約束も、必ず成し遂げられるのだと。「わたしの希望は失われることがない」と言われています。

もし、今もまだキリストのからだは墓の中に納められたままなら、私たちの確信は何の根拠もありませんでした。もし、死んだままのキリストに、単に希望を置いているだけなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者でした。しかし、この方は確かによみがえられたわけです。実際に十字架にかかり、からだは葬られた墓は、2千年たった今もなお変わらずに空っぽなままです。ルカ24：6で御使いが宣言していました。「ここにはおられません。よみがえられたのです。」と。イエス様が約束どおりに身代わりとして十字架で死に、死からよみがえられたからこそ、今私たちは自分の罪がすべて赦され、義とされたのだと確信を持って言うことができます。ローマ4：25でもはっきりとされています。「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」と。

イエス様のよみがえりを通して、私たちの罪の支払いが終わったことを神様は証明してくださいました。イエス様が約束どおり死に勝利し、よみがえられたから、私たちは今新しいのちを持って生きる勝利者とされたのだと確信できるのです。イエス様が約束どおりよみがえられたから、将来の約束も、この先に必ず成し遂げられるのだと喜ぶことができるのです。パウロもキリストの復活こそ、次に続く私たちのための初穂であったと述べていました。Iコリント15:20、23に「:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」、「:23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。」と。キリストが最初で、その後が続くのが私たちという順番があるのです。どうしてわかるのでしょうか。キリストが復活されたからです。もし私たちが、いろいろな難しさを経験する中で、主のあわれみに疑問を抱くことがあれば、与えられている新しいのちや将来の不安や恐れを抱くことがあれば、思い出し続けてください。イエス様の復活はすでに起こりました。そこに目を留め続けることです。ひとりの牧師エドモンド・クラウニーもこのようなことばを残していました。「私たちの希望は過去に根ざしている。イエスは甦られた！私たちの希望は今も変わることがない。イエスは生きておられる！私たちの希望は将来成し遂げられる。イエスは帰ってこられるのだ！」と。

イエス・キリストの復活、これこそが私たちの希望の根拠でした。イエス様が復活されたという歴史的事実は、過去・現在・未来のどんな時においても、私たちのうちに賛美を生み出し続ける確かな土台です。こんなすばらしい希望を知ったのであれば、私たちはきょう、どのように応答するでしょう。もし、このキリストにある本当の希望を、自分のこととして知らない方がおられるのであれば、どうかきょう、知って帰ってください。今もなお変わらずに、神様を除いて別のものに希望を見いだし続けようとしているなら、それは無駄なのだと気づいてください。本当の希望は、神様のうちにしかありません。私やあなたのような罪人のために流された十字架の死を覚えて、どうかきょう、自分の罪を悔い改めてください。そして、よみがえられた救い主を心から愛し従う者として、きょうから歩んでください。本当の希望がある喜びを知って帰ってください。

もうすでに、この希望の尊さを知っておられる皆さん、確かに私たちは、日々の歩みの中でさまざまな困難やひどい苦しみに直面することはあります。しかし、たとえそんな状況下でも、私たちは賛美できる理由を持っています。希望を知らない者ではなく、希望を与えられている者として、喜んで生きていくことです。私たちを愛して、イエス様は十字架で死に、三日目によみがえり、今も生きておられます。この方のうちに希望があります。その希望を受けたなら、この方を心からほめたたえ、今週もともに歩んで行きましょう。